

〔教育実践報告〕

「基礎演習」における「女性学ゼミ」の実験

小 森 治 夫

はじめに

I. 「基礎演習」における「女性学ゼミ」の概要

II. 「基礎演習」においてとりあげた文献

III. 学生による「女性学ゼミ」の評価

おわりに

はじめに

前号(『商経論叢』第48号)では、「『女性学ゼミ』の実験」と題する拙論において、「女性学」をテーマにとりあげた私のここ2～3年間のゼミナール活動について簡単な報告をした。

それに続いて、この小論においては、今年(1998年)の4～7月に行った、1年生の「基礎演習」における「女性学」ゼミの実験について報告することとしたい。

I. 「基礎演習」における「女性学ゼミ」の概要

まず、商経学科の教育体系の中で、「基礎演習」がどのように位置づけられているかについて、簡単に説明しておきたい。

「基礎演習」は、第一部1年生の前期に行われるゼミナール入門編である。「基礎演習」では、大学における学問と研究の方法、すなわち、ゼミ活動の中心をなすレジュメのまとめ方と報告の仕方、ゼミ討論の組織の仕方、そして個人研究テーマの選び方、文献検索の方法、論文の書き方などを、コンピュータ

の活用方法を含めて学ぶ。また、「基礎演習」には、友だちづくりの基礎単位としての意味をもたせようとしている。

後期からは、本格的なゼミナール活動である「演習Ⅰ」が始まる。各教員はゼミナールのテーマを掲げて、ゼミ生を募集する。学生は自分の学びたいテーマのゼミナールを選択する。このゼミは「卒業研究」まで一貫している。

2年生の前期には、「演習Ⅰ」に引き続いて「演習Ⅱ」がある。そして、後期からは「卒業研究」となり、ここで各人の卒業論文をまとめることとなる。

次に、「基礎演習」のゼミナール編成についても、簡単に説明しておきたい。

実は、この「基礎演習」は、1995年度の改革で一度は廃止されたのであるが、2年間の教育実践の結果、「基礎演習」は友だちづくりの基礎単位としてやはり必要ということで、1997年度に復活した科目である。

復活第1年目の昨年度（1997年度）は、「基礎演習」は経済・経営情報の各専攻ごとにゼミナールを組織した。そして、担当教員は、負担増も勘案して、2年に1度は「基礎演習」を担当するということになった。つまり、経済専攻3名、経営情報専攻3名の教員が「基礎演習」を担当することとなった結果、1ゼミナールが14～15名という、本学のゼミナールとしてはやや多めの人数となってしまった。

また、復活第1年目の「基礎演習」の評価についてであるが、学科として十分な総括が行われていないため、また私自身が1997年度の前期に京都大学大学院へ内地留学していたため、他の人からの伝聞に基づく私見になるが、一言でいって「うまくいかなかった」ということになるようである。

その理由の一つは、「基礎演習」を復活させたのはよいとして、その進め方について、学科内で十分な議論と意思統一がなされなかったからであろう。

また、おそらく全国的に共通する問題であろうが、学生の基礎的な学力の低下問題があり、新書が読めないばかりか、本学の場合は毎日の新聞を読まないという学生が圧倒的に多い。

それゆえ、社会科学的なものの見方を教えようとしたゼミナールについては、とくに拒否反応が強かったようである。

復活第2年目の「基礎演習」を私も担当することとなり、前年度の経験と教訓を聞かせてほしい、今年度の担当教員で進め方について議論をしたいと強く訴えたが、必ずしも十分な議論と意思統一が行われないまま、復活第2年目の「基礎演習」がスタートすることとなった。

第1回目は十分な時間をとって、楽しく「基礎演習」を始めようという学科の暖かい配慮(?)によって、1限～4限(8時40分～15時50分)の時間をフルに使って、学外でもよい、自由に学べということになった。そのおかげで、どう企画するかが担当教員の頭を悩ませることとなったが、結局、オープンしたばかりの鹿児島市の水族館を見に行くという、若手教員のアイデアに私も同行させてもらうこととした。もちろん、「基礎演習」ではこんなことをするという、オリエンテーションもきっちり行った。

そして、第2回目からは、古典的なゼミナール方式で運営した。つまり、1冊の文献を4回のゼミナールで輪読するという、けっこう早いスピードで、前期の4月～7月に合計3冊の文献を読んだ。これは、「基礎演習」のゼミナール編成を昨年とは変更して、経済専攻と経営情報専攻とをミックスすることになったからである。つまり、1997年度のように、専攻ごとでゼミナール編成をすると、2つの専攻に完全に分かれてしまうので、友だちづくりの観点からも両専攻を混ぜようというアイデアである。言い換えれば、経営情報専攻の学生は、「演習1」は経営情報専攻の教員からゼミナールを選択するシステムとなっているため、私の「女性学と男性学」のゼミは選択できないので、強引ではあるが、短期集中で教育しようと思ったからである。

(なお、後日談であるが、「基礎演習」を経済専攻と経営情報専攻とのミックスで実施したら、学生から「演習1」も専攻ごとに選ぶのではなく自由に選べるように、つまり、経済専攻の学生も経営情報専攻の教員のゼミが選択でき、経営情報専攻の学生も経済専攻の教員のゼミを選択できるようにしてほしい、との要望が強く出された。この改革は1999年度には実施される。)

Ⅱ.「基礎演習」においてとりあげた文献

次に、私が「基礎演習」における「女性学ゼミ」でとりあげた3冊の文献について、紹介しておきたい。

最初は、導入部として入りやすいのではないかと思い、若い女性にとってはだれもが興味をもっていると思われる、結婚の問題を社会学的に検討した、山田昌弘『結婚の社会学……未婚化・晩婚化はつづくのか』（丸善ライブラリー）をとりあげた。「社会学的」（＝ものごとをありのままに捉える）というのがこの本の特徴であり、「女性学」の本ではないが、現象をうまくすくいあげて説明しようとしている。

ここでは、目次を紹介することにより、内容の紹介に代えたい。

- 1 章 結婚論の現在
- 2 章 結婚難の虚実
- 3 章 結婚意識の男女差……生まれ変わりとしての結婚
- 4 章 低成長期の結婚難……国際結婚という帰結
- 5 章 恋愛の変化と結婚難
- 6 章 もっといい人がいるかもしれないシンдрーム
- 7 章 結婚のゆくえ

次には、ガラリと趣を変えて、アジアの女性たちのおかれている現実をリアルに紹介した、松井やより『女たちのアジア』（岩波新書）をとりあげた。ジャーナリストとしての目がアジア各国の社会の病巣をえぐりつつ、その加担者としての日本の責任をクローズアップしている。また、各国の女性解放運動にも目配りがされている。これは、出版が1987年であり、同じ著者による『女たちがつくるアジア』（岩波書店）が1996年に出版されているが、私は『女たちのアジア』が好きである。

これも、目次を紹介すると、次のとおりである。

はじめに …… アジアとの出会い

I 新生フィリピンを生み出した女たちたち

…… アキノ大統領とウーマン・パワー

II 最貧国の女たち …… 絶望の中から自立を求めて

III プランテーションに生きる女たち …… 植民地支配・過去と現在

IV 近代工場で働く女たち …… 日本式経営と女子労働者

V 海外出稼ぎの女たち …… 虐待と孤独に耐えて

VI 性を搾取される女たち …… 少女売春と性産業の肥大化

VII 伝統的差別と闘う女たち …… ダウリーとレイプ

VIII 宗教を問い直す女たち …… 抑圧の道具から解放の武器に

IX たくましいビルマの女たち …… 母系社会の伝統

X 韓国民主化を担う女たち …… オモニたちの群像

XI 未来を創る女たち …… アジア・フェミニズムの胎動

なお、関連して、『女たちがつくるアジア』の一部と、辛島昇・奈良康明『生活の世界歴史 5 インドの顔』(河出書房新社)の一部もとりあげた^{注)}。

3冊目には、女性学の最もわかりやすい入門書の一つである、中田照子／杉本貴代栄／J. L. サンボンマツ／N. S. オズボーン『学んでみたい女性学』(ミネルヴァ書房)をとりました。「生活編」は、中日新聞に掲載された「女が生きる」シリーズに加筆されたもので、具体的でわかりやすい。また、「理論編」は、女性学や女性の歴史について、日本とアメリカを題材に、平易に書かれている。

これも、目次を紹介すると、次のとおりである。

第I部 生活編

第1章 家族問題

第2章 働き続ける

第3章 子育て

第4章 現代の病巣

第5章 老後問題

第6章 「自立」を求めて

第Ⅱ部 理論編

第1章 女性学について

第2章 日本女性の地位を概観する …… 近代日本女性の変遷

第3章 日本におけるフェミニズムの諸理論

第4章 欧米における女性解放の女性史 …… アメリカを中心として

第5章 アメリカにおけるフェミニズムの諸理論と趨勢

第6章 女性学のクラスでの経験

……アメリカの女性学はどのように行われているか

Ⅲ. 学生による「女性学ゼミ」の評価

学生が「基礎演習」における「女性学ゼミ」をどのように評価しているのか、1998年10月に受講生15名を対象に、簡単なアンケート調査を実施した。回収できたのは11名分で、回収率は73.3%である。

アンケート項目は三つである。

一つは、「あなたは基礎ゼミで『女性学』を学んでよかったですか？」という問いに対して、「よかった、よくなかった、どちらともいえない」から回答を選択した上で、「具体的にどういう点がよかった（よくなかった）ですか？」と問うものである。

二つ目は、「ゼミでは3冊のテキストをとりあげましたが、それぞれの感想を教えてください」というもので、とりあげた3冊のテキストそれぞれについて、感想を書くための自由回答欄を設けた。

三つ目は、「基礎ゼミについて、こうしてほしいという要望があれば、何でもけっこうですので、自由に書いてください」というものである。

サンプル数が少ないため、必ずしも正確な評価とは言えないが、まず、「基礎ゼミで『女性学』を学んでよかったか？」の問いに対しては、10名が「よ

かった」と回答し、1名が「どちらともいえない」と回答している。具体的なよかった点について紹介すると、次のようなものである。

「女性であることでおこる問題がどのようなものであるかを知ることができたし、結婚、出産、離婚など将来起こりうることについて客観的に考える機会を得られたと思います。」

男性から見た女性学と女性から見た女性学の間には大きな違いがあるようだったのが、印象的です。」

「これから自分が経験するであろう結婚、出産などの問題について、どんな問題があるのかわかった。」

「これまでとは違った視点から、女性であるということを考えられた。」

「今まで自分で考えたことのなかった“女性学”について学べたのでよかったと思います。」

「男女差別がさまざまな問題としてあげられた今、職場に男女の差などないと思っていた。しかし、実際にはまだまだ問題があることを知ることができた。」

「今までと違った女性への見方を知ったから。」

「世界にどのような習慣があるのかが分かり、また、世界の女性たちがどのような立場にあるのかを知ることができたので良かったと思います。普段、考えもしなかったことを知り学ぶことができて本当に良かったです。」

「よかったところは、いろいろな人の考えとかを知ることができたのでよかった。あといろいろな行事とかも楽しかった。よくなかったところは、他のゼミの人よりもレポートなどが忙しかった気がする。」

<筆者注 いろいろな行事とは、上述の水族館の他、2回のコンパ（1回は天文館、1回は3班に分けて私の自宅）のことをさすものと思われる。>

「いろいろ考えることができた。」

「自分の担当のところをまとめてレジュメを作成することで、だんだん本を読むときに、大事なところがつかみやすくなった（最初はどうやってまと

めていいかわからなかったけど、回数を重ねるごとにコツをつかんだ)。そして、そのレジュメの作成のときにパソコンを使ったので、パソコンの上達にも役立った。他のゼミの人に『毎回大変だね』と言われてたけど、全然イヤじゃなかった。

1つ困ったことは、自分の担当のところばかり一生懸命読んで、他の人のところを読む時間がなかった。次の本にいくのが早かった。みんながそれぞれ違った考え方をもっていて、それを聞いたので、いろいろな考え方ができるようになった。」

二つ目の「3冊のテキストの感想」については、次のとおりである。

①『結婚の社会学』

「なぜ結婚するか又はしないか、結婚するならどんな条件が重視されるかなど、興味深いテーマではあったが、本の内容が決めつけているような印象だった。もっと自由に議論してみたかったです。」

「すごくおもしろかった。バイトの人たちに熱く語った。私はきっと結婚には慎重だからよかったけど、今すぐにでも結婚したいと思っている人がこの本を読んだら、ためらってしまうだろうなアと思う。それから、『もっといい人がいるかもしれない』と思うのは、その人のことを本当に愛していないからじゃないかな、と思った。お金もあって、学歴もあって、かっこよくて、性格もピカイチな人なんて、いないと思うことにしました。そんな人を求めて夢見ても、いつまでたっても1人きりだと思う。」

「結婚については、ただ『結婚したい!』と思うだけで、あとは何も考えたことはなかった。でも、この本によって結婚の意味の深さを知った。」

「男性の視点から好き勝手に書かれた気がしたが、確かに、と思う点も多くて面白かった。」

「結婚について深く考えるいい機会だったと思う。」

「結婚に関する女性の考え方が分かった。私が考えてもいなかったことな

ども書かれてあって、新しい発見もあった。」

「結婚についての考え方を改めさせられた。」

「みんなが興味のあるテーマでよかったと思った。」

「内容が身近なものだったので、分かりやすかった。」

「幸せな女の人になりたいです。」

②『女たちのアジア』

「少しショックなことまで知らされたという感じ。でも知ってよかったと思う。この時のレジュメはむずかしかった。内容をまとめるより先にその内容を理解するまでが大変で、発表する本人には理解できても、それ以外の人にはあまりよく理解できない感じだった。テーマが重かったようにも思う。」

「日本は平和な国であるが、同じアジアの国の女性でも、とても苦しんでいる人々がいることを知った。生きていくために幼い子どもが売られるなんて、信じられなかった。」

「今まで、他のアジアの国の女性がどういう生活をしているのだろうと考えたこともなかったが、この本を読んで、アジアの女性がかかえている問題がたくさんあることが分かった。早くこのような問題が改善されるといいと思った。」

「売春など、今ではすすんでやる人もいるけれど、昔はむりやりやらされていて、とてもおどろいた。」

「とても興味深い内容で、自分が知らないようなことが多かった。」

「日本以外の国の状況をととてもよく知ることができ、いろいろなことを考えさせられた。」

「アジアでの現実を知り、ショックを受けたけど、いろいろ話しあえてよかったと思う。」

「アジアの女性の強さや、女性への不十分な社会保障など、いろいろ考えさせられた。」

「とても考えさせられました。」

「範囲が広がっていて、ちょっと分かりにくかった。」

「読みおわるのが早かった。おもしろかった」

なお、『インドの顔』をレポートした学生は次のように書いている。

「インドでの結婚について中心に読んだ。インドでは、子供のときに結婚させられて初潮を迎える前に性交渉があったり、幼くして妊娠してしまったりすることがあって、とてもおどろいた。

女って何なんだろうと思った。

結婚するとき、花嫁の父は相手に多額のお金やおくりものをわたす。再婚するとき、花嫁の新しい相手は元の夫に金をおくらなければならない。男は結婚、離婚で金もうけしてるみたいでイヤだなアと思った。

この本を読んでからインドが気になる。なんだか。」

③『学んでみたい女性学』

「3冊の中ではわりとまとめやすいし、わかりやすい内容だった。でも1冊を4回で終わらせてしまったので、自分がまとめたところしか印象がない。

『女性学』と大きくくくってあるので、テーマがさまざまで、上の2冊のように一貫した感じはなかった。」

「初めて女性学を学ぶ人にはいい本だと思った。いろいろな事例も載っていて、分かりやすいと思った。」

「だんだん高齢化していく今日この頃だが、なぜ女性のほうが介護する人が多いのか不思議だった。」

「あまりゼミでは使わなかったけれども、読んでみると他のところもおもしろかった。」

「前の2冊ほど興味をもつことができなかった。なぜか分からないが、前の2冊の方が、おもしろかったような気がする。」

「上の2つの本よりも印象がうすい。」

「難しいけど、楽しかった。」

「今までとは少しちがった、講義っぽい話だった。」

「いろいろな問題がありますね、がんばりたいと思います。」

「読み終わるのが早かった。」

『女は子供を産んではじめて一人前』という考えだった時代はもう終わって、今は女性が出産することも離婚することも自分の意思でやる。昔は女性には発言権がなかったけれども、今は女も自分の考えを言うべきだと思う。私はそれができないやつだなアと思う。女も強く生きていかなければ、と考えた本でした。」

最後に、「基礎ゼミについての要望」である。もっと一般的なことを期待していたのだが、私のゼミ運営についての注文がほとんどになってしまった。

「いつも1人でレジュメを作るのではなくて、グループで作って『女性学』の中のテーマに基づいて調べてきて発表するとかしてもおもしろかったのではないのでしょうか。」

「進むペースが早かったので、もう少しゆっくりとしてほしい。他の人が考えていることをもっと知りたかった。」

「もう少しゆっくりとしたペースで授業を行ってほしいです。」

「ゼミはよかったけど、レポートの回数を減らしてほしい。」

「買う本をできるだけ少なくしてもらえると嬉しい。」

「もっとアットホームな雰囲気であればよかったと思った。」

「他のゼミにも出席できるようにしてほしい」

なお、商経学科において、1998年度前期に実施した「授業評価アンケート」にも、私の担当した「基礎演習」に対する感想が書かれているので、紹介しておきたい。

『基礎演習』は良かったけれども、演習1・2も経済と経営情報を分けない方が良くと思う。基礎演習はレポートが多かった。テスト前に出されると

大変だった」

「とても楽しかった。自分のところで精一杯だったので、他の人が発表するところまで読めなかった。内容はとても面白く、小森ゼミで良かった。」

「自分でまとめるのは大変だったけど、女性差別とかいろいろ女性には深刻な問題があるのがわかって良かった。」

「女子高生などの問題（援助交際、シングルマザーなど）、現代の日本の若い女性をターゲットにした問題なども取り上げてほしい。」

「テキストを購入することが多く、少し高かった。」

「ちょっと本が多く、お金がかかりすぎた。300円とかだったらまだ良かった。」

おわりに

Iの「概要」でも書いたように、前期の4月～7月の14回ほどの「基礎演習」において、3冊の文献を読破するのにはかなりの無理があったようである。アンケートに学生も書いているように、かなりハードなゼミナールであったかもしれない。

しかし、ゼミ生は、ブツブツ言いながらも、よくついてきてくれたと思う。おかげで、初期のねらいの何割かは達成することができた。短期集中型で「女性学」を学ぶという条件設定のために、いささかアトランダムな文献の選択になったような気もするが、それなりに私の意図するところをくみとってくれたゼミ生が何人かいることが、アンケートからもわかった。

そして、今回のハードなゼミナールの経験を貴重な教訓として、次回からはやはりゼミナール方式を基本としながらも、「女性学」のテーマに関連するビデオを積極的に活用しようと思っている。というのは、私は、「日本経済論」の講義においては、「水資源開発問題を考える」として何本かのダム・河口堰に関するビデオを学生に見せているが、非常にわかりやすいと好評(?)であるからである。

幸い、「女性学」に関するビデオもようやく収集できてきたので（例えば、

男女雇用機会均等法, セクシュアル・ハラスメント, 家庭内暴力, 児童虐待, 家事の分担, 男女の共生, シングルマザー, 従軍慰安婦など), 次回にはこの財産をフルに使って, 視覚的にもイメージがつかみやすい「女性学」ゼミナールを創っていきたいと思っている。

注) 『女たちのつくるアジア』のうち, I の 1, I の 3, II の 1 をとりあげた。

序章 アジアの女たちは, いま

I 経済発展と女性への暴力

- 1 人身売買される女性たち
- 2 女性を襲うエイズ
- 3 国際移住労働の女性化
- 4 日比混血児と日本社会
- 5 沈黙を破る女性たち

II 「開発」侵略と闘う女たち

- 1 フィリピン開発計画……生活の場を追われる住民
- 2 タイのユーカリ植林とエビ養殖……農漁村の女たちの抵抗
- 3 サラワクの木材伐採とダム建設……森の先住民族の闘い
- 4 台湾とタイの観光開発……海外旅行ブームの陰で

III 抵抗からオルタナティブ実践へ

- 1 もうひとつのネグロス……フィリピン
- 2 女たちのつながり……香港・中国
- 3 村の未来を織る……タイ
- 4 山村に変革の風……ネパール
- 5 痛みを力に……韓国

終章 女たちがめざすアジアの世紀

『生活の世界歴史 5 インドの顔』のうち, 「因習と戒律の中で……女の一生」をとりあげた。

プロローグ

言語と民族のるつぼ

カーストに生まれ, カーストに死ぬ

ヒンドゥー教徒の生活

因習と戒律の中で……女の一生

快樂の思想

都市の顔, 農村の顔

改革の思想